

ちよつと
聴いて

ください

アメリカよ、日本よ



米谷ふみ子

ちょっと聴いてください
アメリカよ、日本よ

1996年3月15日 第1刷印刷

1996年4月1日 第1刷発行

著 者 ^{こめたに}米谷ふみ子

発行者 川橋 啓一

印刷製本 大日本印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(3545)0131 (代表)

編集=書籍編集部 販売=書籍販売部

振替 00100-7-1730

©Fumiko Kometani 1993 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-264108-8

聴いてください
アメリカよ、日本よ

米谷ふみ子

a s a h i b u n g o i b u n k o

LB

単行本……………一九九三年四月 朝日新聞社刊

表紙・扉 神田昇和

目 次

I

久しぶりの梅雨 11

ことばの喪失 14

二十七年間に学んだ英語 17

大阪人の誇りはいずこへ 20

郷愁の大阪弁 23

長寿国ニッポン? 27

“外国人教師”息子のとまどい 29

帰国エレジー 38

ごみとリサイクル 45

私の日本滞在所感 48

II

私の日本とアメリカ 60

ぼやく女 おなこ 65

ロスアンジェルス
の紅白歌合戦 71

外から見た危ない日本 79

ショックを受けた首相発言 82

米国で見るウノ・スキヤンダル 85

わが家の日常茶飯事 88

二つの国に住んで 92

近ごろ思うこと 98

大統領の健康／女と男の問題

特殊児の親／フランスの女首相

旅先の土地に思いやりを／少数民族の心

真珠湾奇襲五十周年 107

恐ろしいアメリカの話 111

日本たたきの予防法 116

III

アメリカで体験した人種差別

二つの国境にて 133

東京入国管理局 144

偏見と差別 153

ちよつと聴いてください／叔父上様に

ハリウッドから叔父上様に 161

京都よ！ 167

ロスアンジェルス暴動に思う 169

IV

「国家秘密法」について 178

米の湾岸派兵 180

NOと言えなかった日本 184

ある反戦集会

アメリカに暮らす憂鬱 188

アメリカから考えるPKO 193

197

V

私の戦後は闘いだつた

200

一人の親として特殊教育に望むこと

204

ノアの卒業式

208

私は貝になりたくない

211

学校五日制がもたらす問題

215

VI

インターマリッジ三十年

219

夫婦の力学

236

総領の甚六

240

文庫版あとがき

初出一覧

ちよつと聴いてください

アメリカよ、日本よ

挿
画

米
谷
ふ
み
子

I

久しぶりの梅雨



十数年来、南カリフォルニアに住んでいる。その前はニューヨーク。

からからに乾き、絶えず静電気が起こりそうな南カリフォルニア、皮膚の弾力性もなくなり、緊張さえ感じる、そんな南カリフォルニアから、傘を持って梅雨の日本にやって来た。

鼻腔、脳、そして足先の細胞までたっぷりと水分を充たし、しっとりと雨の中を生き返ったように歩く。久しぶりに雨が傘にあたる音が心地よい。折からの選挙戦の狂騒が、この雨音で消され、自分一人雨のしとみに囲まれ、守られているようにさえ感じる。

次の日、薄陽が差し出した。たちまちにして、あの心地良さは首筋から汗となって滲み出て、息苦しく、温泉の中をビニールにくるまって歩いていくようだ。カリフォルニアでは使い慣れないハンカチを、絶えず動かして汗を拭く。永年しなかった動作である。また、ハンカチを持ち慣れていないから、すぐに失くしてしまう。汗を拭こうと思っていつも探し回ら

ねばならない。頭は蒸された鶏の如く、もう機能を果たさない。

マンハッタンと見間違ふほどの高層ビルが東京に来るたびに増え、それも、マンハッタンよりずっと狭い道路をはさんで林立しだした街におのきながらビルに入ると、大きな傘立てがある。そのビルに入る人数分だけあるかどうか、いつも気になるのだが、一本ずつロックするようになっている。男物、女物、赤、黒、黄、種々雑多の傘がひしめき合つて、穴の中に入れられている。

傘立てのない所は、入り口でビニールの袋をくれる。雫を屋内に持ち込ませないためだ。床に畳が敷いてある錯覚を起こす。欧米の国では見られない。同じ東洋の中国はどうだろうと、最近中国から帰つて来た友人に訊ねたら、そんなものなかったという。

こういうコンクリートの高層建築でも、内と外とをきつちりと区別する習慣が、ひょんなところに残っている。

以前、日本に来た時、アメリカ人である私の連れ合いには、これが面白く見えたらしい。傘は靴に比べて安いのに、靴はそこらに脱ぎ散らかして平気な日本人が、傘だけをロックすると笑った。それでも靴にその習慣が残らなくてよかったと私は思う。四十階建てオフィスのビルの下足番なんて、大変なことである。

私達の住んでいる南カリフォルニアでは、誰も傘を持って歩かない。第一、歩かないから傘が要らない。ここは雨期は冬に来る。皆車に乗っているので、少々濡れてもたいしたこと

はないと思つてゐる。雨期の雨は初めから終わりまで、日本の梅雨の末期のようにたいへんひっきり返したように降る。それでも人びとは、傘なしで何とかしようとするのだ。

傘を持つという動作は、よっぽど慣れないと邪魔くさいものらしい。私も日本に来るたびに傘を持つて来ては失う。脇に挟んで歩くと、そんな習慣がないから忘れてしまい、落としたのも気が付かずにいる。日本に来て、いつも新しい傘を買い直してアメリカに帰る。

アメリカでは傘をどうするのだろうと、連れ合いに訊ねた。ニューヨークでは、ビルの入り口で傘の雫をよく振り切つて、そのまま、オフィスなり、ホテルなり、アパートの中に入り、肩入れか、バスタブに突っ込んで置く。地下鉄の車内で、一体、あの忘れられた大量の傘はどうするのだろうなあ、と彼は見回した。

そのためか、アメリカは売つてゐる傘の量も少なくバラエティーもない。値段も安いし、傘にみえを張らないのも、こういうことを見越してゐるからなのだろうか。

たとえばアメリカに、あの傘立てが現れたとしても、そして幸運にも地下鉄で失わなかったとしても、私の連れ合いはロックした鍵を失うので、所詮傘なしである。

(86年7月)

ことばの喪失

昔、日本人であれば日本語を忘れることはないと言った人がいます。私もそれを信じていました。それが、アメリカに住む歳月が重なるにつれて定かでなくなりました。何という無責任な言葉だと思ひ始めました。その人は外国に永く住んだこともなく、現地の人と一緒に暮らしたこともない人なんだと思います。

一九六〇年にアメリカに渡り、アメリカ人と結婚し、子供が出来てから八年間、日本に帰らなかった期間、日本語がずばずばと抜けていきました。

子供と共に幼児語を学び、手当たり次第に読んだ英語の新聞、本、近所のつき合い、テレビ、心理学者、先生に振^ねじ込みに行くために鍛えた英語が私の脳を占領し出しました。

そのうちに日本語の方が怪しくなってきました。漢字は読めても、書く時に、すぐに出て来ません。手紙を書くのも字引と首^うつぴきになり出しました。

その頃からアメリカのことが英語の新聞やテレビ、人の話で詳しく分かるようになりました。それと、日本からときたま送ってくる雑誌にジャーナリストが書いたアメリカが、現実と食い違っているのです。

早速、日本の人びとに私が知っているアメリカを知らせたくなり、原稿を書き出したので

す。ところがとてもひどい文章で、すべりが悪いのは自分でも分かるのですが、どう直してよいのやら分かりません。その上、漢字はどっちに偏やつくりが行くのやら、逆になることもしばしば。郵便局の郵が陸になったり、辞書の辞が韜になったりします。

また、書いている最中に、ああいう熟語があった、と思うのです。はげしいような意味のと。発音が出て来ません。「そうれつ」？　そして字引をその発音で引くと壮烈と出て来ます。これじゃない。そして、うすうすと脳のどこかで熾のような形が浮かび、それをシキレツと呼んでいるんです。また字引を引きますが、そんなものはありません。それで途方に暮れ、漢和辞典を引きに行こうと廊下を歩いている時に、シレッツという発音がふわあーと出て来ます。慌てて元の場所に戻って字引を引き、その熟語を見出すということをします。時間の消耗^{おびただ}夥しく、これで書こうというのですから話になりません。

ぼかっと思つていた言葉が出て来なければ草臥^{くたび}もうけ。あります。思つていた言葉が出て来なければ草臥^{くたび}もうけ。

その読む本もニューヨーク郊外に住んでいたところは手に入らず、ロスアンジェルスへ移ってからしばらくして、一九七七年に紀伊國屋書店がダウンタウンに開店して買えるようになったのです。

近所に住んでいる日本人も似たりよつたりで、文章を書こうとしていない人に訊ねても、私以上にお話になりません。日本人同士結婚している所は少しはましなのですが、それも来た時だけで、子供が学校に行き出して英語を喋るようになり出すと頼りになりません。